

てん ぐ ざわ が よう せき
天狗沢瓦窯跡

発掘調査概報



天狗沢瓦窯跡出土軒丸瓦

天狗沢瓦窯跡発掘調査概報

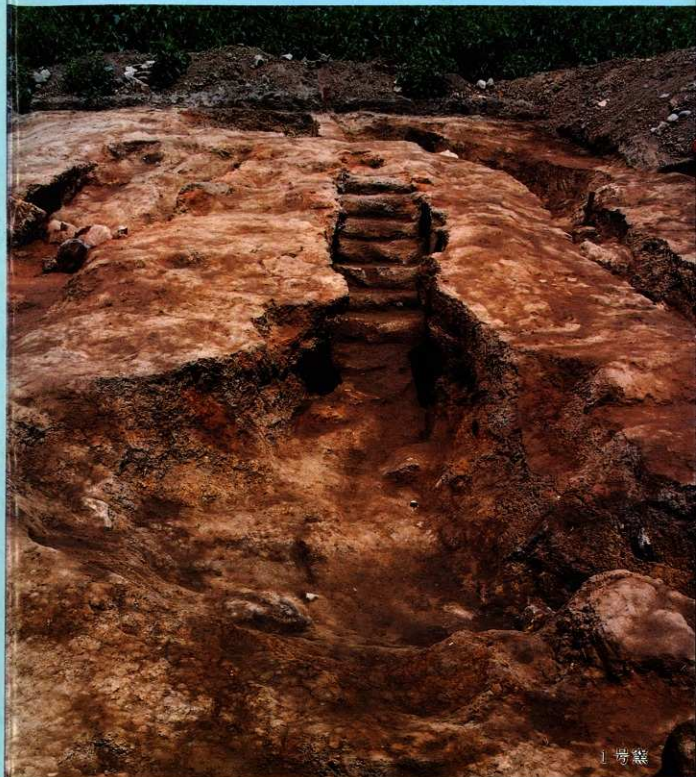
昭和63年3月31日発行

発行 山梨県中巨摩郡敷島町教育委員会

〒400-01 山梨県中巨摩郡敷島町島上条1251 TEL 0552 (77) 3111

印刷 青柳総合印刷

〒400-01 山梨県中巨摩郡敷島町長塚526 TEL 0552 (77) 3512



1 場 窯

序

敷島町は甲府盆地の西北部に位置し、南に富士山を望み西に南アルプスを一望できる南部地域と北部の山間地帯とに分かれています。南北に細長く、緑の多い町です。

敷島町と双葉町が接する貢川上流の東側台地、天狗沢区から第1次試掘と第2次発掘調査の結果、白鳳時代に使われた形式の異なる二基の瓦窯跡と多くの甕瓦、平瓦、丸瓦をはじめ須恵器の坏蓋等が発掘されました。これは甲府盆地西部における唯一の白鳳時代寺院に關係する遺跡であり、瓦窯としては本県最古のものであるだけに、この発見が甲府盆地古代史の解明に大きな影響を及ぼすものとして、極めて価値が高いと言われています。

この度、瓦窯跡調査の概報が発刊されるに当たり、発掘調査のご指導並びに発掘作業に従事された関係各位に心から感謝申し上げますと共に、今後の御協力をお願い申し上げます。

昭和63年3月31日

天狗沢瓦窯跡調査団長

敷島町教育委員会教育長

上笹 春男

目次

I 天狗沢瓦窯跡の発掘

- 1 瓦窯跡の発見
- 2 調査の経過
- 3 瓦窯跡のようす
- 4 出土した瓦と須恵器
- 5 天狗沢瓦窯跡の年代

II 古代の瓦作り

- 1 瓦窯のしくみ
- 2 瓦のつくり方

III 瓦生産までの歴史と天狗沢瓦窯

- 1 周辺の遺跡
- 2 仏教伝来と瓦
- 3 古代甲斐の仏教文化
- 4 天狗沢窯から見た古代甲斐国

IV おわりに

例言

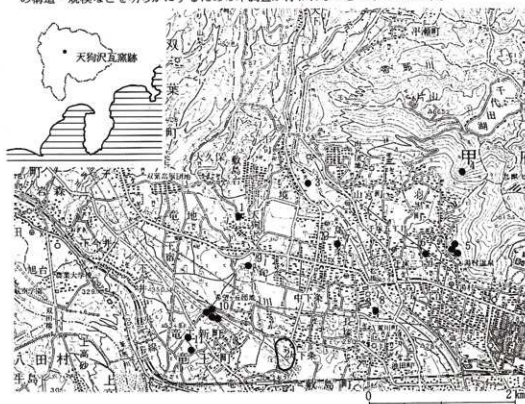
- 1 本書は、山梨県中巨摩郡敷島町天狗沢字北川291・292・294番地に所在する天狗沢瓦窯跡の発掘調査概報である。
- 2 この調査は、敷島町教育委員会が昭和61～62年の2次にわたって実施した学術調査である。
- 3 調査にあたっては別記調査団を編成し、各委員・諸氏の御協力を得た。とくに町文化協会郷土研究部（部長 坂本徳三氏 他30名）、地権者 相川春樹氏にはお世話になった。記して感謝したい。
- 4 本書の執筆は、I・IIを榎原功一、IIIを末木健、IVを羽中田杜雄が分担執筆し、末木と榎原が編集した。

I 天狗沢瓦窯跡の発掘

1 瓦窯跡の発見

天狗沢瓦窯跡は、茅ヶ岳の南麓を南北に流れる貢川と、金峰山を源とする貢川とによって尾根状に削られた台地の南端、山梨県中巨摩郡敷島町天狗沢字北川に位置します。貢川を見おろし、南東に甲府の市街地を臨む天狗沢の桑畑の中に古代の「布目瓦」が散乱していることについて、実は近年まであまり知られていませんでした。古い記録がないことに加え、50年ほど前から地主の相川春樹氏が大切に保護してくれたからです。ただ、一部の研究者の間では、瓦が散布する畑が傾斜地であり、採集された瓦が略子目の叩き目・細かい布目痕をもつこと、平瓦が「桶巻き作り」であること、溶けた須恵器の破片があることなどから、今から約1300年前に瓦を焼いた登り窯の跡ではないかと注目されていました。

昭和61年春、相川氏が桑の改植を行った際、初めて完全に軒丸瓦が姿をあらわしました。それは山梨県内では発見例のない、最も古い様相を示したものでした。そこで同年12月10・11日に町教育委員会が行なった試掘調査の結果、数基の窯跡が確認されたため、昭和62年度に、窯の構造・規模などを明らかにするための本調査が行われることになったのです。



瓦窯跡と周辺の遺跡

- 1 天狗沢瓦窯跡
- 2 金の尾遺跡
- 3 大塚古墳
- 4 羽黒山白山古墳
- 5 湯村古墳群
- 6 加年郡塚古墳
- 7 大塚古墳
- 8 穴塚古墳
- 9 庄生塚
- 10 ニッ塚古墳群
- 11 堀塚古墳群

2 調査の経過

本調査は昭和62年5月20日（水）から6月6日（土）まで、16日間行われました。その間、5月31日の遺跡見学会には町内外から約250名の方々が参加したほか、6月1日には教島中学1年から3年までの804名が瓦窯跡を訪れました。ここで、順を追って調査の経過を振り返ってみましょう。

①準備

試掘調査によって瓦窯跡の一部がわかっていたために、それにもとづいて調査地区を設定し、5mごとに記録のための杭を打ちました。調査地区内の農作物は地区外に移植しました。

②トレンチ調査

調査地区内に数本のトレンチ（試掘溝）を掘り、遺物の出土のし方、遺構の有無を調べるとともに、土層の堆積状況を観察します。この作業によって面的に詳しく調査する場所を絞り込みました。

③遺構確認

ジョレンなどを使って地表を薄く平らに削っていくと、瓦窯跡の部分に周囲の地山とは異なった土の堆積が確認できます。また、窯の付属施設などの有無も同じ方法で調べます。本瓦窯跡では排水溝を検出しましたが、瓦を作るための工房跡や粘土の採掘坑が見つかった例もあります。

④ベルト設定と掘り下げ

瓦窯跡のかたちを確認したら、直交する数本のベルト（土層観察用の土手）を残して窯の底まで移植ゴテで掘り下げます。途中で発見された瓦などは、図面に位置を記録します。ベルトの側面の土層を図化した後、ベルトを取り去ります。

⑤写真撮影・実測・埋め戻し

遺物は出土状況を写真撮影した後、ビニール袋に入れて取り上げます。瓦窯跡全体を清掃して写真撮影し、平面図・断面図を作成すると調査はほぼ終了です。この後瓦窯跡を保存するために、孔がたくさんあいたビニールシートをかぶせて埋め戻しました。



発掘調査前の様子（5月20日）



トレンチ調査（5月20日）



1号窯の土層観察用ベルト（5月30日）



遺跡見学会（5月31日）



埋め戻し（6月24日）

3 瓦窯跡のようす

約400㎡の調査地区内からは瓦窯跡2基（1・2号窯）と溝址1本（1号溝）を検出しました。また、調査地区北側のトレンチ（試掘溝）では、更に1基の瓦窯跡（3号窯）と思われる焼土の広がりを確認しています。

①1号窯

傾斜地に築かれたトンネル状の窯で、瓦を並べるための階段が造り付けられた地下式有段登り窯です。窯の天井部と煙道部は崩落、消滅していましたが、その他は良好に保たれていました。窯は7段の階段がなる焼成部、燃焼部、摺鉢状に掘り窪められた灰原によって構成され、全体の長さは9mあります。窯の幅は80~90cm、階段の1段は奥行き30~40cm、高さ15~19cm、です。また、焼成部の傾斜角は22°、燃焼部と煙道部付近の比高は2.1mほどありました。燃焼部から焼成部の内壁と床面には粘土が貼りつけられ、激しい焼成の結果セメントのように硬くなっています。また壁体（壁土）にはスサ（刻みワラ）の混入が著しく認められました。

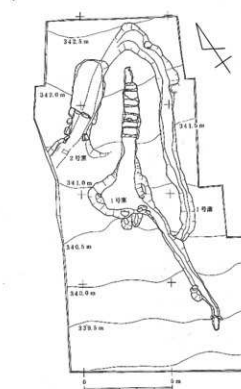
この1号窯の灰原からは長さ8m、幅40~60cmの溝が南に伸びています。更に幅80cm~1m、深さ40~60cmの1号溝が、逆U字状に1号窯を取りまわっています。両者は窯を雨水から保護する排水溝でしょう。

②2号窯

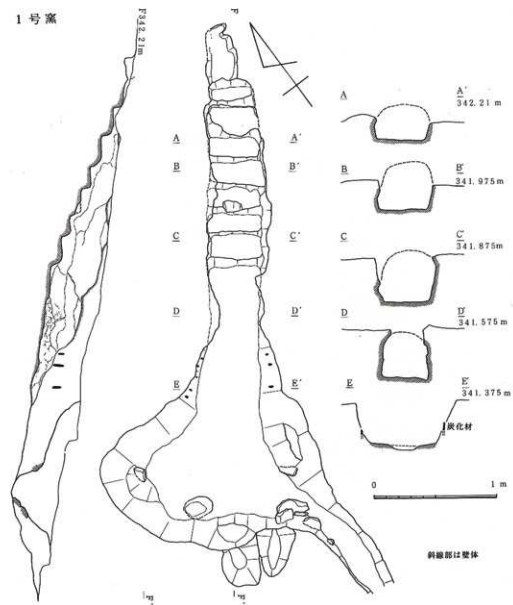
掘り込みが浅いため、天井部を地表上に構築した半地下式登り窯と思われます。天井部が耕作により削平されてしまったため、窯の規模は明確ではありませんが、現状では燃焼部長は1.8m、焼成部長は3m、焼成部幅は1.75mです。また焼成部の傾斜角は15°、灰原と焼成部北端の比高は75cmです。

この窯で特徴的なのは、焚口から燃焼部の側壁と、燃焼部と焼成部の境に石が並べてあることです。これらは燃焼部を修築した際の補強材と思われます。

なお、2号窯は1号溝を埋めた上に造られていることから、1号窯よりも新しいことがわかりました。



1号窯



1号窯 (南から)



1号窯瓦出土状況 (南から)

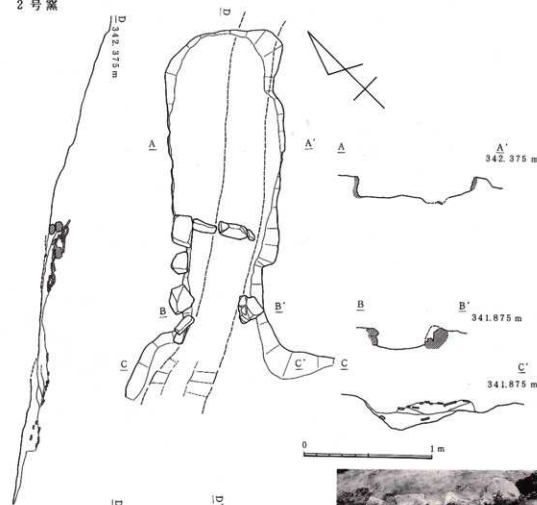


1号窯 瓦出土状況 (南から)



1号溝 (1号窯の排水溝) 瓦出土状況 (南から)

2号窯

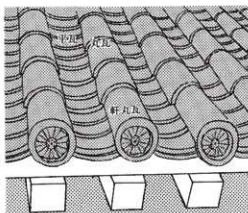


燃焼部の配石 (東から)

4 出土した瓦と須恵器

1号窯では、灰原・1号溝を中心に多量の瓦が出土しました。また瓦に混じって、形が崩れた須恵器が壁体と共に出土したことから、瓦を焼く間に須恵器を焼いた瓦陶兼窯であるうと思われまふ。

2号窯では、燃焼部から平瓦の大形破片が重なり出て出土し、灰原からは細かく割れた破片が多量に出土しました。ほとんどの瓦が赤褐色の酸化炭焼成であること、須恵器が混じっていないことが特徴です。



「本瓦葺き」の屋根瓦

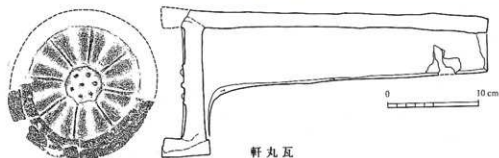
①瓦

出土した瓦は、平瓦と丸瓦の組み合わせで構成される「本瓦葺き」の瓦で、現代の民家の屋根に葺かれている黒く「いぶし」がかけられた「棧瓦」とは大きく異なります。「本瓦葺き」とは、凹面を上に向けて重なるように並べた平瓦の列の間に、凸面を上に向けた丸瓦を重ねたもので、今日でも寺院建築に見ることが出来ます。その軒先には、文様で装飾された軒丸瓦（鍔瓦）、軒平瓦が特別に葺かれます。本瓦窯跡では軒丸瓦・平瓦・丸瓦は出土しましたが、軒平瓦は見つかりませんでした。

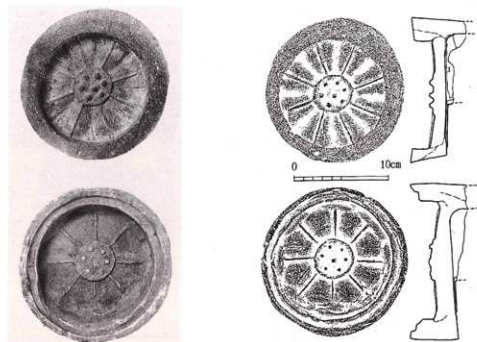
(1)軒丸瓦

軒丸瓦は、1号窯と1号溝中から破片を含めて20点以上出土しました。そのうち瓦当面（丸い文様の部分）がほぼ完全に残存した例は12点あります。2号窯に確実に伴った軒丸瓦はありませんでした。

軒丸瓦の瓦当面には、周縁が素縁の「素縁タイプ」と1段の段差をもつ「有段タイプ」の2種類があります。両者とも8枚の花弁の連華文を形どった「8葉素弁連華文」ですが、



軒丸瓦



軒丸瓦の瓦当面

前者が立体的で花弁の中央に隆起線をもつに対し、後者は平坦で、隆起線によって花弁を表現しています。瓦当面の直径はどちらも約15 cmあります。出土量は「素縁タイプ」が18点以上で、「有段タイプ」は僅か2点だけでした。

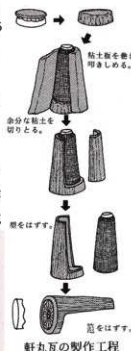
ほぼ完全に復元された「素縁タイプ」の軒丸瓦によると、長さは35.5 cm、重さは2.5 kgあります。

<1 本作り技法について>

軒丸瓦の割れ口や瓦当面を観察した結果、「1 本作り技法」という特殊な方法によって作られていることがわかりました。軒丸瓦を作る場合、瓦当面と丸瓦を別々に作って置いて接合するのですが、焼成中などに離れてしまうことが多いため、両者を同時に接合しながら作ることによりはずれにくくした製作技法です。瓦当面に布目痕が残った例があることから、右図のような手順を推定しました。



瓦当面の布目痕



軒丸瓦の製作工程

②丸瓦

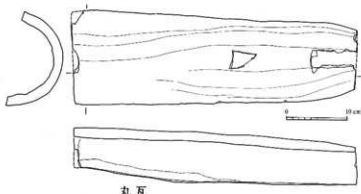
丸瓦は1号窯や1号溝中などから出土しました。「行基式」といわれる半円筒形の瓦で、重ねて葺くために一端の幅が狭くなっています。この屋根瓦は、奈良市の元興寺で実際にみるることができます。

ほぼ完全に復元できた丸瓦(右図)によると、長さは45cm、広端の幅は15.5cm、狭端の幅は10cm、重さは2.5kgあります。

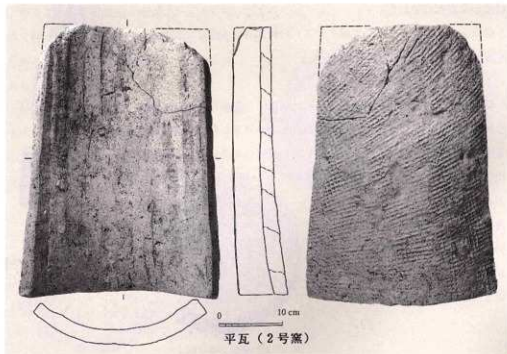
③平瓦

平瓦は1・2号両窯から多量に出土しました。

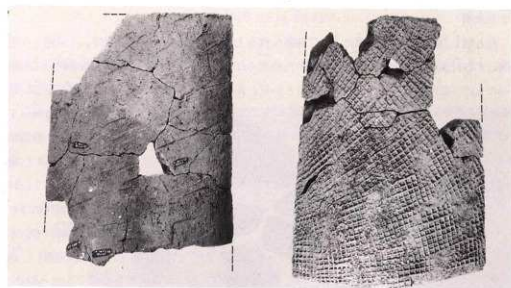
すべて桶状の型に粘土を貼って作った「桶巻き作り」によるもので、ほぼ長方形を呈していますが、短辺の片方が他方よりもやや狭くなっています。屋根を葺く時は、狭端を下方に向けて上へ重ね合わせていくのです。2号窯から出土した平瓦によると、長さは41cm、狭端の幅は25cm、広端の幅は30cm、重さは4.5kgあります。また桶型は、瓦の長さと同曲から高さ41cm、底径36cmと思われます。桶型



丸瓦



平瓦(2号窯)



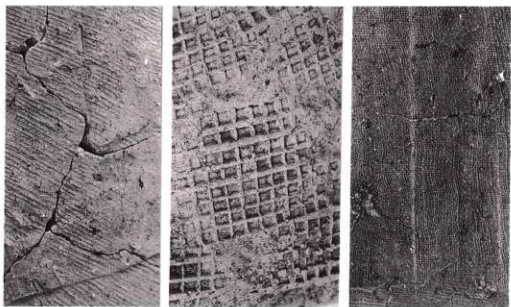
平行叩き目の平瓦(1号窯)

格子叩き目の平瓦(2号窯)

に使用された板の幅は、瓦の凹面に残された圧痕から3~4cmであることがわかります。

1号窯と2号窯の平瓦には細かい点で違いが見られます。まず前者が粘土板巻きつけのみであるのに対し、後者は粘土板巻きつけか粘土紐巻きつけであること。凸面の叩き板の文様が前者は平行叩き目のみであるのに対し、後者は格子叩き目のみであること。焼成方法が前者は還元炎焼成が多いのに対し、後者は酸化炎焼成が多いことです。

凹面には必ず布目痕が見られます。1cm四方に7~11本程度の糸目数をもつ細布で、麻布であらうと思われます。



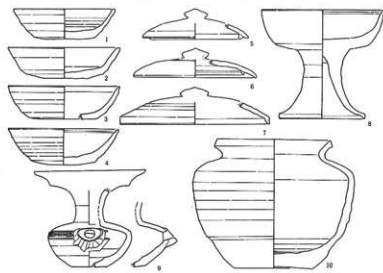
平行叩き目

格子叩き目

布目痕と桶型痕

②須恵器

瓦と同じ方法で還元炎焼成によって硬質に焼き上げられた青灰色の焼き物で、1号窯・1号溝とその付近から出土しました。高温のため重なるものや、重ねられたままで焼き付いてしまったもの、壁体が付着したものがあることから、瓦と同じ頃1号窯で焼かれたでしょう。種類には環（1～4、食器のひとつ）、蓋（5～7、杯や高杯のフタ）、高杯（8、お供え用）、甕（9、液体入れ）、小型甕（10、貯蔵用）、大型甕があり



須恵器（1/4）（10は歪みを推定復元）

5 天狗沢瓦窯跡の年代

出土した瓦、須恵器及び窯の構造などから、瓦窯跡の年代を知ることができます。まず軒平瓦の「8葉素弁蓮華文」の文様と「1本作り技法」が、大津宮（西暦 667～672年）の関連寺院である南滋賀興寺・穴太庵寺などとほぼ共通すること。また瓦と同じ頃焼かれたと思われる須恵器が7世紀後半の特徴を示すこと。更に窯の構造が、7世紀末から8世紀以降に「平窯」が普及する以前の「登り窯」であること。その他、平瓦の製作技法が轆轤き作りであること、軒平瓦を伴わないことなど、あらゆる点を総合すると天狗沢瓦窯跡で瓦生産が行われていたのは、7世紀後半（白鳳時代）であると思われます。

II 古代の瓦作り

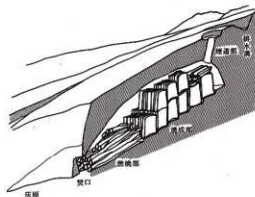
1 瓦窯のしくみ

①窯の立地条件

瓦の製作は、他の焼き物にも共通しますが、粘土採取から焼成までが一連の工程としてはほぼ同じ場所で行われます。そこで考えられる窯の立地条件は1原料となる良質な粘土を大量に、たやすく得られること 2粘土を練るための水が存在すること 3一定方向の風が求められること 4薪材を大量に得られること 5消費地（供給先の寺院）になるべく近いこと 6傾斜地であること（登り窯の場合）があげられます。

②窯の構造

1号窯の復元図が右の図です。燃焼部（薪を積み上げて燃焼させる場所）や、焼成部（瓦を並べて焼成する場所）を外気からできるだけ遮断することにより、温度を上げることができます。本窯のような瓦を並べるための階段は、瓦窯独特の施設として、飛鳥寺創建の際（西暦 588年頃）百濟から伝わったものです。



1号窯 想像復元図

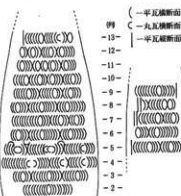
③瓦の詰め方

本瓦窯跡とはほぼ同じ頃、窯詰め状態のまま廃棄された京都府栗栖野瓦窯跡6号窯址によると、平瓦は数枚単位で凹面と凹面、凸面と凸面を向き合せて上下2段に列状に並べ、その隙間を埋めるかのように丸瓦を千鳥状に重ね合わせて効率よく詰められている様子が観察されます。1回に焼成された瓦の枚数は、16段の栗栖野6号窯址の場合、平瓦が460枚、丸瓦が81枚でしたから、7段の階段をもつ本瓦窯跡1号窯はその半分以下でしょう。



④焼成方法

はじめは焚口を開放したまま焼き（酸化炎焼成）、最後の段階で焚口を閉じて約1200℃の高温で焼き上げます（還元炎焼成）。この時、空気が遮断されるために青灰色に仕上がります。焼成期間は1週間以上にも及ぶといわれます。



6号窯平面模式図
（北田栄三「京都府栗栖野瓦窯跡」日本考古学年報 38）

2 瓦の作り方

①平瓦

平瓦の製法には「桶巻き作り」と「1枚作り」の2方法があります。「桶巻き作り」とは、細長い板を縦り合せたバケツ大の桶型に粘土土を粘土板を巻きつけ、格子や平行の文様を彫刻した叩き板で叩きしめ、型をはずした後、縦に4分割するための切り込みを入れ、乾燥させてから割ることにより、4枚分の瓦を同時に作る方法です。



1: 平瓦(模骨)、2: 桶に布を巻く 3: 叩き板で粘土板を切る、4: 粘土板を桶に巻く、5: 叩き板で粘土をのめる、6: 桶をゆるめる、7: 桶を抜く、8: 布を取り去る、9: 叩き板、10: 四つ割(出来上がり)
(酒詰秀一・森修夫編「日本歴史考古学を学ぶ下」1986より)

「1枚作り」とは、1枚分の瓦型に粘土板をのせ、主に縄を巻きつけた叩き板で叩きしめ、型からはずして1枚ずつ作る方法です。どちらにも凹面には布目痕が見られますが、これは瓦と型を離しやすくするために、型を麻布で覆った裏跡です。山梨県内では本瓦裏跡のほか春日居町寺本庵寺から発見された大部分の瓦が前者であるのに対し、一宮町甲斐国分寺は後者によるものです。4枚分の粘土を扱う桶巻き作りは大変な重労働のうえ、能率は決して良くなかったために8世紀中頃から1枚作りに改められたのでしょう。

②丸瓦

丸瓦には本瓦裏跡のような「行基式丸瓦」と、丸瓦どうしを接続しやすいように段をつけた「玉縁式丸瓦」があります。どちらも1升瓶状の木型に粘土板か粘土土を巻き、叩き板で叩きしめた後へうで整形し、型を抜いて乾燥させ、縦に半載して2枚同時に作ります。平瓦と同じく型を麻布で覆ったために、凹面には布目痕が見られます。

③軒丸瓦(龍瓦)

軒丸瓦は、通常スタンプを押すように「范」(型)を押つけて文様をつけた瓦当面と丸瓦を別々に作っておき、乾燥しきらないうちに接合して製作します。寺本庵寺、甲斐国分寺は全ての手法によるものです。ところが特殊例として、本瓦裏跡のように瓦当面に粘土円筒にはめ込んだ後に、円筒を半載して丸瓦状に仕上げる手法があります。また粘土円筒に瓦当用粘土を貼つけた後に范を押つけ、円筒の部分を丸瓦状に仕上げる手法があり、これらを「1本作り技法」とよんでいます。

瓦当の文様は、日本最古の飛鳥寺以来、平安時代中頃までは一貫して蓮華文がモチーフとされ、時代によって、寺院によって個性的なさまざまな花の文様が生み出されました。今日までに知られる文様の数々は、まさに百花繚乱といえるでしょう。

III 瓦生産までの歴史と天狗沢瓦窯

1 周辺の遺跡

敷島町には今から約8000年前の縄文時代早期から人が住み始め、今日まで連続として生活していたことが、町内の遺跡やその出土品によって知られています。たとえば4500年前の縄文中期の旧清川小学校遺跡、金の宮遺跡、金の尾遺跡などから住居跡や大量の土器・石器が発見されています。1800年前の弥生時代には、金の尾遺跡から炭化米が出土したことで、この付近に稲作が定着したことがわかりました。

金の尾遺跡は町の最南端にある遺跡で、縄文中期の集落と弥生時代の集落が発見されています。特に弥生時代の32軒の集落跡は県内で最大であるだけでなく、17基の方形周溝墓は、この時期県下最大のものであります。出土した土器からは長野県や静岡県原から影響を受けたものが見られ、盆地北側と南側に稲作文化がもたらされていることを示しています。

1700年前から始まる古墳時代の前半では、大きな遺跡は見えていませんが、後半の1500年以降になると甲府市千塚の加牟那塚古墳を始め、敷島町境の大塚古墳・赤坂台にある往生塚・二ツ塚古墳群など、甲府市西側や本町周辺で盛んに古墳が造られるようになります。

加牟那塚古墳は御坂町姥塚遺跡につぐ県下第2位の横穴式石室を持ち、直径40mの墳丘に埴輪を並べた巨大古墳です。これより後に造られたであろう湯村山古墳群や前述の古墳群は、加牟那塚古墳に囲まれた豪族を中心として、政治的・文化的・血縁的に強いきずなで結ばれていた有力豪族の墓と思われます。彼等が後に寺院建立を企画する中心勢力となったのでしょう。



金の尾遺跡



加牟那塚古墳



大塚古墳

2 仏教伝来と瓦

日本に仏教が伝来したのは6世紀の中頃で、今からおよそ1450年前、朝鮮半島の百済国聖明王が「釈迦仏金銅像1体、幡蓋若干、経論若干巻」を欽明天皇に献じたのが、日本への仏教伝来の第1歩と言われている。仏教を排除する物部氏との争いに勝利した蘇我氏は、百済から寺院建立に必要な人々を渡来させ、588年に飛鳥寺の建立にとりかきました。

7世紀に入ると、天皇家も仏教文化受け入れに積極的になり、聖徳太子によって四天王寺や法隆寺が建てられました。大化元年には仏教興隆の詔があり、天武天皇14年(685)には諸国・家ごとに仏舎を造り、仏像と経典をおいて礼拝するよう詔がだされています。このころから全国に寺院が盛んに造られるようになったのでしょう。

日本の寺院建築は飛鳥寺が初めてですが、屋根に瓦をのせた建物もこの飛鳥寺が日本で初めてです。この瓦は朝鮮の百済から渡来した4人の瓦博士によって作られたもので、軒九瓦の文様はハスの花を图案化しています。6世紀から7世紀に日本に伝わった朝鮮の瓦には、百済系・高句麗系・新羅系の瓦がありますが、朝鮮の瓦は百済に始まったといわれ、日本国内でも3系統の瓦があり区別されることなく生産され使用されています。寺院を建立した各地域の豪族は、瓦の文様よりも寺院を建てる事だけで精一杯だったのかもしれませんが。



蓮の花



三国時代の
朝鮮半島の瓦



飛鳥寺の復元図と瓦(坪井清正『飛鳥の寺と国分寺』1985を一部改変)

3 古代甲斐の仏教文化

本県に仏教文化が伝わったのは7世紀の中頃といわれていますから、日本への仏教伝来から100年後の事です。東山梨郡春日居町寺の前古墳や狐塚古墳、東八代郡中道町稲荷塚古墳から《銅碗》が各1個づつ出土していますが、銅碗は仏教の飲食供養具の一つで、仏・僧尼の托鉢・食事に使用される物です。古墳石室内部の副葬品として埋納されていたことから、伝来年代や最初に仏教文化が伝わった地域を推定することができます。

銅碗の出土した中道町稲荷塚周辺は、古墳時代前期の鏡子塚古墳を始め、大丸山古墳・丸山古墳などの巨大な古墳群が並び、初期の国造(くにのみやつこ)の居住地でありましたが、後期になると主要な勢力が御坂町や甲府市北部に移動してしまいました。しかし、相変わらず7世紀中頃までは盛んに仏教文化を受け入れて、勢力回復を狙っていたことが、稲荷塚古墳からの銅碗出土によってうかがえます。

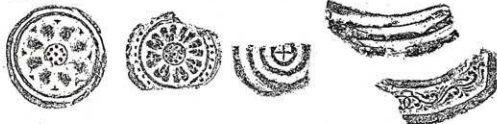
春日居町寺の前古墳や狐塚古墳の埋葬者は、御坂の純塚古墳を造った勢力と結び付いた新興勢力で、いち早く仏教文化を受け入れたのでしょう。銅碗を入手した後は寺院建立に熱心となり、7世紀の後半には同町の寺本に塔・金堂・講堂などの伽藍を持つ大きな寺院を建てています。寺本より僅かに早く寺院建立を企てたのが、甲府西側の加牟那塚古墳に係る勢力です。敷島町天狗沢に窯を築き、瓦を焼いています。

奈良時代以前の仏教文化は、このように八代・山梨・巨摩地方のそれぞれに分散していますが、奈良時代中頃、天平13年(741)に聖武天皇の詔により各国毎に《国分寺・国分尼寺》を造ることとなりました。それが現在一宮町にある国指定史跡の国分寺・国分尼寺です。

寺本陶寺の瓦



甲斐国分寺の瓦



4 天狗沢窯から見た古代甲斐国

7世紀の後半、甲斐国の国中地方はおおよそ八代・山梨・巨麻の三地域に別れていたと考えられています。八代地方は古墳時代初頭から有力者の住んでいた伝統ある土地柄で、山梨地方は古墳時代後期最大の埴塚古墳などを中心とした新興勢力、巨麻地方は加牟那塚古墳等を中心とした新興勢力であります。恐らく力は殆ど同じくらの豪族が、甲斐国内の支配と統一に関係して、その力の優劣を競っていたのがこの時代だと思います。7世紀終末から8世紀初めに国府が置かれ、白鳳時代寺院や国分寺の建立がされたのは山梨地方ですから、結果的には3者の争いは山梨勢力の勝利に終わったわけですが、本町の天狗沢窯とその出土瓦の発見によって、とても興味ある物語が想像できるようになりました。

天狗沢窯出土の軒丸瓦の特徴は、前の図に示したように、高勾麗様式あるいは統一新羅以前の新羅様式の文様と、一本作りという技法にあります。この両者の特徴を持っている古代寺院は、滋賀県大津市にある南滋賀院寺や穴太院寺などで、これらの寺は天智天皇が大津宮造営に伴って建立した寺院と伝えられています。窯から出土した須臾器の推定年代は7世紀第3四半期と思われるので、大津宮遷都の667年とほぼ同年代です。このことから天狗沢窯の工人は大津宮から派遣された可能性が高く、672年の壬申の乱以後は巨麻勢力が大津宮からの支援を失って、甲斐国内の勢力争いから脱落したものと思われます。

乱に勝利した大海人皇（天武天皇）に「甲斐の勇者」を派遣した山梨勢力は、春日居町寺本に寺院を建立し、破れた巨麻勢力は寺院建立を止し半ばであきらめたか、小規模の寺院にしたのか、今はその寺跡を探すことができません。しかし、巨麻の勢力は奈良時代や平安時代にも続いてあったであろうし、後の巨麻郡の郡家（郡役所）も天狗沢窯跡からさほど遠い處ではなかったでしょう。平安時代の文書「倭名抄」を見ると、巨麻郡以外の郡には郡名と同じ郡名があるので、その郡に各郡家が置かれたのですが、巨麻郡には巨麻郡はありません。668年の高句麗滅亡で渡来した高句麗人が、大挙して甲斐の巨麻郡に移り住んだ為、郡名がおこったと言われていますが、彼らの居住地が分散していたのか、移住後約半世紀の716年に武蔵国に移されたため、平安期まで郡名が残らなかったのでしょうか。なお、高句麗人が巨麻地方の豪族の命令により天狗沢窯の瓦生産に関与した可能性も十分考えられます。



IV おわりに

白鳳時代に登り窯で瓦を焼成した天狗沢窯跡は、「甲斐の勇者」の時代を物語る有力寺院が、すでに巨麻（摩）郡地方にあったことを裏付ける重要な発見として話題になりました。今回の調査は、限られた地域でしたが「さくらんぼ塚」と通称される金山神社西側に隣接した畑地斜面の発掘により、窯跡2基、その窯で焼いた多量の瓦や須臾器が検出されました。特に八葉素弁蓮華文を飾る2種類の軒丸瓦が出土し、その文様の特徴から7世紀の後半と推測されており、本県では最古の瓦窯として知られるなど、一応の成果を収めることができました。

この調査・発掘の事実をもとにその所見をまとめたので、瓦窯跡で現れた内容を早く紹介するため、概報として報告をするものであります。今後の課題としては、遺跡の窯跡群を明確にすると共に製作工房や工人住居等を探索継続調査の必要性、さらにこの窯で生産された瓦の供給先の寺跡の追究がありますが、盆地西側に存在の寺院は春日居・寺本院寺発見に続くものとして、歴史研究の上から関心が高まっております。最後になりましたが布目瓦出土の学生時代の通報から調査まで、多大なご協力をいただきました相川春樹氏に厚くお礼を申し上げます。

天狗沢瓦窯跡調査団・関係者名簿（敬称略）

調査団長 上笹春男（数島町教育委員会教育長） **副団長** 飯沼今朝輝（数島町教育委員会教育次長） 羽中田壮雄（数島町文化財審議会会長） **調査委員** 上原真人（奈良国立文化財研究所） 斉藤孝正（名古屋大学） 横松又次・末木健・小林真・中込司郎（数島町文化財審議会委員） 清雲俊元（山梨県文化財審議会委員） 十妻駿武（山梨学院大学） 谷口一夫・萩原三雄（数島山梨文化財研究所） 坂本美夫（山梨県埋蔵文化財センター） 新津健（山梨県教育庁文化課） **調査員** 宮沢公雄・柳原功一（数島山梨文化財研究所） **地権者** 相川春樹 **調査参加者** 数島町文化協会郷土研究部（部長 坂本三雄ほか30名） **調査協力者** 議員正義野沢昌康 服部治則 野上丈助 服部敬史 佐野勝広 畑大介 山下孝司 **事務局長** 山口正智（数島町教育委員会） **事務局員** 長田徳一・中込正己（数島町教育委員会）（順不同）



天狗沢瓦窯跡の遺景